野田宇太郎 文学散歩 第20巻

野田宇太郎文学散歩

第20巻

文一総合出版

著者略歴　明治42年（1909）10月，福岡県筑後松崎に生れる。朝倉中学卒業後病気で学業を断念，久留米で詩作に入る。東京に移住して昭和23(1948)年まで，出版編集に携わる。その間，雑誌『文藝』，つづいて『藝林閒歩』の編集責任者となり，以後，著述生活に入って詩作と近代文学史研究に専念。『新東京文学散歩』に始まる文学散歩を発表して“文学散歩”を創始。文学散歩本の他，全詩集『夜の蜩』，近代文学研究『日本耽美派文学の誕生』，木下杢太郎研究『きしのあかしや』，近代詩史『詩人と詩集』，キリシタン史『少年使節』，紀行随筆『日本の旅路』，戦中記録『灰の季節』，戦後記録『混沌の季節』など著作多し。昭和16(1941)年，第1回九州文学賞(詩)受賞，昭和50（1975）年度藝術選奨文部大臣賞受賞，昭和52（1977）年，第3回明治村賞受賞および紫綬褒章受章。

野田宇太郎文学散歩　20
四国文学散歩

昭和53年9月5日　　初版第1刷発行

著　者　　野田宇太郎
発行者　　佐藤　弘一
発行所　　株式会社文一総合出版　東京都千代田区神田神保町1－32
電話東京(291)8049　　振替東京2-42149

©1978　0395-90120-7354　　印刷・製本　奥村印刷
定価は，函・帯に表示してあります。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目

次

伊豫

四国への旅　一三
三津浜にて　一六
獨歩と琵琶僧　漱石の上陸
子規の故郷　三三
松山城　髪とひげ　「父の墓」　子規堂にて　正岡家のあと
子規庵主極堂　三六
ホトトギス　老眼鏡
漱石と松山　四一
「坊つちやん」の宿　松山中学の鬼瓦　「坊つちやん」の移転　愚陀仏庵と子規
道後温泉　五一
湯桁の歌　「坊つちやん」と子規と　公園の句碑
石手寺のみくじ　六一

樗堂と一茶　八四
虚子と西の下　八七
生い立ち　海と山との間　遍路の墓
宇和島というところ　九四
鶴島城址にて　九七
大和田建樹の家　一〇〇
鉄道唱歌　生い立ち
神田川の岸辺　一〇六
泰平寺の墓地　法円寺と秋水
逍遙追慕　一〇九
島崎藤村の「哀歌」　墓前にて　春怨の詩人
「雪中梅」の作者　一一九
政治小説　大超寺の墓
雑草のなかに　一二四
宇和島と高野長英　一二七
伊東瑞溪　蘭学塾跡

卯之町まで　一二
「南国抄」の町　法華津峠の讃美歌　二宮敬作　長英の隠れ家
「思出の記」と伊豫　一三
今治と文人　一三五
蘆花と今治　一三八
従兄伊勢牧師　青春時代の出発　英語教師　大きな机
瀬戸内海　一三九
「忘れえぬ人々」　多島海　岩城島　牧水と三浦家　酒と海

讃岐

南讃岐　一五九
多度津と善通寺　金毘羅詣り　丸亀にて　沙弥島　白峰　高松

北讃岐

屋島談古嶺　柴野栗山の故郷　平賀源内故家　志度寺と謡曲「海人」　一八五

小豆島

阿豆枳辞摩　俳人放哉終焉の地　春月の「海図」詩碑　小豆島の作家や詩人達　一九八

阿波

阿波の水門　土佐泊にて　撫養　阿波の徳島　寺町にて　異邦人モラエス　モラエスの墓　二二五

土佐

南荒飄寓のうた　室戸岬にて　土佐浜街道　紀貫之館址　二三五

のほとり　韮生の吉井勇　土佐の高知　城　自由民権
遺跡　高知の孤蝶　寺田寅彦　鹿持雅澄の墓　野中兼
山の墓と婉の宅址　五台山と桂浜　中村にて　堺事件の
流刑地　足摺岬　宿毛

＊別刷写真はすべて著者の記録撮影で
本文と共に無断使用を禁じます。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

四国文学散歩　おぼえがき

『四国文学散歩』は初め昭和三十二年五月から六月にかけて『関西文学散歩』続篇の形で蹈査執筆にかかり、先ず「愛媛篇」のみを完成した。その後の都市造成で松山や宇和島は幾分昔の面影を失ったが、本巻ではそれを「伊豫」と改めただけで、昭和三十二年の旅の感動をそのままにとどめることに留意した。その他中江藤樹にゆかりの深い肱川流域の大洲も蹈査記録したが文学散歩の目的に鑑み、敢て本巻には収めなかった。

「讃岐」「阿波」「土佐」は昭和四十年八月の高知地方の蹈査に始まり、昭和四十一年十一月下旬には「讃岐」「阿波」の蹈査を重ね、昭和四十六年十一月中旬に至ってあらためて四国全土の綜合的蹈査を行うことが出来た。従って本巻は「伊豫」及び「讃岐」の小豆島を除いて昭和四十六年現在の記録を基準とした。小豆島を蹈査記録したのは昭和五十二年十一月上旬であり、それを加えた本巻によって『四国文学散歩』はようやく完成したのである。

（著者）

四国文学散歩

伊

豫

四国への旅

四国に旅立つためにわたくしは小雨の降りしきる夜の神戸港の桟橋から、関西汽船別府航路のN丸のタラップを登って行った。何しろ四国の土を踏むのは今度がはじめてである。それに一夜を船で過さねばならないので、四国が急に遠い国に感じられてならない。船で一夜を過すのも、わたくしにとっては中学生の頃以来のことである。

ケビンに荷物を置くとすぐに上甲板の昇り口を捜した。雨は降っているが、船上から夜の神戸を眺めてみたいと思ったのである。この二千トン足らずの船の上甲板は大して広くもない。しかし色とりどりの神戸市街の燈火が、まるで人工楽園のようにやみのなかに濡れながらかがやいている光景をみつめていると、かつて遠い海外への旅に出た近代の文学者たちの様々な思い出も浮んできて、いよいよ旅らしい気持になった。……そのとき出港を報せるドラが鳴った。N丸は雨のなかを静かに動きはじめる。

大阪湾から明石海峡を過ぎる頃は、沿岸の燈がちらちらとまたたいていたが、間もなくそれらも乏しくなり、全くやみの底に消えてしまった。船内もいつしか眠りにしずんでしまうと、雨足が播磨灘の黒一色の夜にかぼそく白い針金のように降りそそいでいるのが、まるで夜の表面に薄い皮でも張ったように思われて、船窓からあかずその有様を眺めた。

未知の四国のことでわたくしの心は溢れていた。機関の響きで小刻みに振動するケビンの燈の下で、一人四国の地図をひろげていると、『古事記』の神話がぼそぼそとささやきかけてくる。……「あなにやしえをとめ」と伊邪那岐命がいうと、伊邪那美命がまた「あなにやしえをとこ」と愛の言葉をかえす。そして二人は「御合ひまして」、まず日本八島の第一番目に生れたのが淡道之穂之狭別嶋であった。

……次に伊豫之二名嶋を生みたまひき。此の嶋は身一つにして面四つ有り。面毎に名有り。故伊豫国を愛比売と謂ひ、讃岐国を飯依比古と謂ひ、粟国を大宜都比売と謂ひ、土佐国を建依別と謂ふ。

四国の古名は伊豫の二名嶋であった。その次に生れたのが隠伎之三子嶋、四番目が筑紫嶋（九州）、五番目が伊伎嶋、六番目が津嶋（対馬）、七番目が佐渡嶋、そして八番目が本州の大倭豊秋津嶋である。……

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com